

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 27

ヒアリとアルゼンチンアリ

堤 康徳

ヒアリの侵入がとまらない。今年5月尼崎市で、強い毒をもつ南米原産のアリ「ヒアリ」が、日本国内で初めて確認された。ヒアリが発見されたのは、中国からの貨物船のコンテナ内部だった。その後、神戸、名古屋、横浜などの大きな港でも次々と見つかり、すでに内陸部でも存在が確認されている。ヒアリに刺されると、強い痛みやかゆみを感じるらしい。また、生態系への影響も懸念される。8月23日付朝日新聞朝刊によれば、「ニュージーランドが駆除に成功したが、中国では拡大に歯止めがかからず、台湾でも対策に躍起になっている」。日本の専門家は、ヒアリ駆除には、「まずは港湾での徹底した水際対策」が必要だという。

ヒアリと聞いて(もちろん新聞の報道で初めて聞く名前だったが)私がまっさきに思い出したのは、カルヴィーノの中篇小説『アルゼンチンアリ』(La formica argentina)だった。アルゼンチンアリはヒアリと同じく南米原産ながら別種のアリである。アルゼンチンアリは、日本版 Wikipedia によれば、「果樹を食害し、人間を含む他生物の巣に侵入してきてその住人を襲い、そこから追い出し時には絶滅に追いやる、その結果間接的に生態系を破壊するなど、このうえもなく厄介なことで世界的に有名である」。アルゼンチンアリは、1993年に日本で初めて発見されてから、11都道府県で繁殖が拡大しているという。

じつは、カルヴィーノが少年期を過ごした1920年代、30年代のリヴィエラ・ディ・ポネンテ(リグ

ーリア地方西沿岸部)もまた、実際にこのアリの被害に遭ったのだった。



【『アルゼンチンアリ』『短篇集』表紙】

1952年に『ボッテゲー・オスクーレ』誌(Botteghe Oscure)に発表された『アルゼンチンアリ』(日本語訳は、「アルゼンチン蟻」『現代イタリア幻想短篇集』所収、竹山博英編・訳、国書刊行会、1984年)はその後、1958年の『短篇集』(I Racconti)第4部「むずかしい生活」(La vita difficile)に再録され、さらに1965年、同じく環境問題を扱った中篇『スモッグの雲』(La nuvola di smog)とともに一巻に収められた。

『アルゼンチンアリ』を読んでみよう。物語の語り手でもある主人公が、妻と幼い息子を連れて新しい家に引っ越してくる。だが、新居はいたところアリだらけだった。

私たちは、電球を点けた。ふた部屋に、このひとつの電球しかなかった。アリが途切れなく一列をなし壁をつたっていたが、戸口の隙間から入ってくるのはわかるが、その出所がどこかはわからなかった。私たちの手はすでにアリで覆われていた。これらがどんなのアリなのかよく見ようとして、私たちは両手を開き、目の前にかざしながらも、たえず手首を動かして、アリが腕まで降りてこないようにした。アリは触っても感覚が残らないほど小さくて、休みなく動き、まるで私たちに与えるかすかなかゆみ自体によって動かされているようだった。そのとき初めて名前が思い浮かんだ。「アルゼンチンアリ」(formiche argentine)だ。いや、むしろ単数形の formica argentina と呼ばれている。私はすでに以前、ここがアルゼンチンアリのいる村だと聞いたはずなのだが、今になって初めて、そのような言葉にどのような感覚が与えられるのかがわかった。あらゆる方向に広がるこのかゆみは、手を握ろうが、手をこすり合わせようが、完全に振り払うことはできなかった。なぜなら、群れを離れたアリが必ず残り、腕や服をかけまわるからだ。アリをつぶせば、黒い小さな点となって砂つぶのように落下し、指にはすっぽくて刺すようなあの臭いが残るのだった。(La formica argentina, in Italo Calvino, *Romanzi e racconti*, vol. 1, Milano, Mondadori, 2005, p. 451)

アルゼンチンアリは、主人公の故郷の村々のアリとは根本的にちがっていた。それは、「数をかぞえることのできる、身体や重さをもつ具体的な敵」ではなかった。彼の故郷のアリが、「猫やウサギのように、触ったり、どかしたりできる生き物」であるのにたいし、アルゼンチンアリは、「霧や砂のような、力では対抗できない敵」(Ibid, p. 461)なのである。その圧倒的な数と生命力の前に、人はなすすべもない。

隣人たちは、このアリの侵入という事態に、それぞれがことなる態度で対応している。やたらに殺虫剤をまく者、複雑な駆除装置を作って設置する者がいる一方で、主人公の家主である夫人は、助言を求めに来た主人公夫婦に、家をきれいし、土地を耕せばアリの侵入を防げるはずだと言って、冷たく彼らを突き放す。アリの駆除を担当する市

の職員は、毒性のうすい糖蜜を配って女王アリの駆除を図るが、繁殖に拍車をかけているようにはか見えない。

アルゼンチンアリの政治の暗喩、あるいはカフカ的な悪夢の象徴ととらえるような寓意的な解釈を、カルヴィーノ自身は断固として拒んでいる。それは以下の手紙からも明らかである。

これは、私が思うに、いかなる政治的な示唆もない物語です。アリについての物語であり、アルゼンチンアリがいかなるものかを叙述しています。それは、リヴィエーラ・ディ・ポネンテではきわめてよく知られた災厄なのです。これは、自然の悪との闘いの話であり、絶対的に現実的な物語です。(Lettera a Ornella Sobrero, 1960, in Italo Calvino, *Lettere*, Milano, Mondadori, 2000, p. 665)

『アルゼンチンアリ』は、あらゆる批評家がつねにカフカ的な夢の物語だと指摘してきましたが、そうではありません。私が生涯に書いたなかで最も現実的な物語であり、私の少年時代に相当する 1920 年代と 30 年代の、サン・レモの農地とリヴィエーラ・ディ・ポネンテの大半におけるアルゼンチンアリの侵入の状況を徹底した正確さで描いています。(Lettera a Goffredo Fofi, 1984, in Italo Calvino, in *Lettere*, cit., p. 1511)

アルゼンチンアリへの言及は、カルヴィーノ最初の短篇集『カラスが最後に来る』(Ultimo viene il corvo, 1949)の冒頭の作品「ある日の午後、アダモは」のなかにすでに見られる。この短篇については本連載第 1 回でとりあげた。主人公は 15 歳の庭師リベレソと 14 歳の家政婦マリア・ヌンツィアータのふたり。自然児のリベレソは、ハナムグリやヒキガエルなど、庭に生息するさまざまな昆虫や小動物を少女にプレゼントして彼女の気を引こうとするのだ。結末に近い一節を読んでみよう。

桃の木を上から下まで、とても小さな「アルゼンチン」アリが行ったり来たりしていた。

「見ろよ」とリベレソが言って、桃の切り株のう

えに手を置いた。アリが手から彼の体を這い上がったが、彼はそれを振り払わなかった。

「どうして？」とマリア・ヌンツィアータは言った。「どうして体じゅうアリだらけにするの？」

彼の手はもう真っ黒で、手首からアリがどんどん這い上がっていた。

「手をどけて」とマリア・ヌンツィアータはうめくように言った。「アリをみんな体にのせるつもり？」

アリは彼の裸の腕を通り始め、すでに肘まで達していた。もはや腕全体が、うごめく黒い小さな点のヴェールに覆われていた。アリはすでにわきの下に達していたが、それでも彼は振り払おうとしなかった。

「そこをどきなさい、リベレソ、腕を水のなかに入れて！」

リベレソは笑った。数匹のアリが彼の顔を通った。

「リベレソったら！ なんでもあなたの言うとおりにするから！ あなたがくれるプレゼント、みんなもらうから！」

彼は首に両腕をまきつけ、アリを振り落とし始めた。(Un pomeriggio, Adamo, in *Romanzi e racconti*, vol., 1, cit., pp. 160-161)

野生児リベレソには、アルゼンチンアリへの恐怖はみじんも感じられない。この一節を読むかぎり、先に引用した手紙のなかでカルヴィーノが「自然の悪」(un male naturale)と定義したアルゼンチンアリへの危機意識も希薄である。このアリもまた、庭に生息する他の多様な生き物のひとつにすぎない。

ところで、この短篇の主人公には、実在のモデルがいる。実際にカルヴィーノ家の庭師だったリベレソ・グリエルミである。イタロ・カルヴィーノよりも2歳年下で、去年91歳で亡くなった。2016年9月26日付『レプブリカ』紙の追悼記事(http://genova.repubblica.it/cronaca/2016/09/24/news/e_morto_il_ragazzo_giardiniera_di_calvino_che_egal_rospi_alle_fanciulle-148426876/)に、2005年に行われた彼へのインタビューの一部が再録されている。それによれば、あるときグリエルミがアルゼンチンアリのことを少年イタロに話すと、その

数時間後には、それを題材にみごとな短篇を仕上げたというのだ！

『アルゼンチンアリ』の結末は、現実からの逃避のようにも、自然が送りつけてきた小さな強敵にたいする無力感の現れのようにも思われるが、それ以上に、ひとすじの希望を感じさせる。主人公が、日が暮れなすむ頃、妻と息子といっしょに港に向かう。「ここにはアリがない」という妻に、彼は答える。「それにとっても涼しくて、気持ちがいいね」。(Italo Calvino, *Romanzi e racconti*, vol., 1, cit., p. 482)そこにはいつもと変わらぬ穏やかな海が広がり、日に焼けた漁師たちが、夜の漁の準備をしているのだ。ヒアリの侵入を受けた私たちは今、外来種のアリが船のコンテナで運ばれ、港から侵入してくることを知っている。それだけに、このような結末がよけいに牧歌的に感じられてしまう。

外来種のアリの侵入という事態を招いたのは、言うまでもなく、人間自身である。シルヴィオ・ペレツラによれば、サン・レモに、植物といっしょにアルゼンチンアリをもちこんだのは農学者の父マリオだったという(Silvio Perella, *Calvino*, Bari, Laterza, 1995, p. 45)。本連載第11回で指摘したように、『木のぼり男爵』の主人公コジモには、リグーリアの森を知り尽くす猟師でもあったマリオの姿が投影されていると思われる。農学者として自然を観察の対象としながら、猟師あるいは耕作者として、自然とともに自然のなかで生きるマリオは、「壁と文字の書かれた紙の迷宮」(『サン・ジョヴァンニの道』)に閉じこめられたイタロとは対照的に、ロビンソン・クルーソーのような「自分自身の主人」(『公認のゴミ箱』)だったのだ。

『アルゼンチンアリ』の主人公が、イナゴマメの木や柿の木のある庭で、息子にこんなことを言う場面がある。「さあお父さんがおまえに木登りを教えてやろう」(Adesso papà ti insegna a arrampicarsi)。 (Italo Calvino, *Romanzi e racconti*, vol.1, cit., p. 454)。この一文も、マリオの影を想起させて興味深い。

(上智大学講師)

レオパルディと《イタリア》

國司 航佑

1861年3月17日のイタリア王国誕生の宣言、あるいは1870年ローマ教皇領の併合とその翌年のローマへの遷都——これらはイタリアの国家統一の到達点を示す代表的な歴史事象だと考えられている。そこに至るまで、ジュゼッペ・マッツィーニ(1805-1872)、カヴール伯(1810-1861)、ジュゼッペ・ガリバルディ(1807-1882)等、教科書に出てくるような著名な愛国者たちがイタリア統一に向けてまさに命がけで戦った。しかしイタリアは、中世以来、長らく独立した様々な国家の集まりを示すものでしかなかった。つまり彼らは、未だ存在しないイタリアという国のために命がけで戦ったことになる。なぜか。

理念としてのイタリアは、国家統一の遥か前(ダンテの時代)から存在していた。ただそれは、実態を伴わないものであり、一部の知識人の頭脳の中のみ存在していた理念であった。その理念を現実のものにしようと国家統一運動が開始されるのは、ようやく19世紀になってのことである。その直接の契機は、よく考えられているように、18世紀末から19世紀初頭にかけて生じたフランス革命とナポレオン戦争にあると見てよい。ただ、未だ存在していない祖国のために命を賭するためには、内発的な心の動きが必要であり、それが多くの人間に共有されなければならなかったはずである。

現に、イタリア統一という歴史事象は、政治的な歴史の枠組みのうちに収めて説明がつくものではない。政治的な国家統一と共に、イタリア半島に住む人間の心のうちに「イタリア」という理念が定着していく長い時間をかけたプロセスが語られなければならない。つまりイタリアの国家統一は、政治的な事象であるとともに、極めて文化的な事象でもあるのだ。そうした観点からは、ガリバルディ千人隊の活躍と同様に、アレッサンドロ・マンゾ

ーニの文学やジュゼッペ・ヴェルディの音楽が重要な役割を担ったと考えられる。リソルジメント(Risorgimento=[イタリアの]再生)という表現が指し示すのは、こうした多面的な性質を内包するイタリア誕生の物語である。



【ジャコモ・レオパルディの肖像】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Giacomo_Leopardi

本連載の主人公ジャコモ・レオパルディは、1798年現マルケ州の小村レカナータに生まれ、1837年ナポリに没した。リソルジメント初期にその生涯を過ごした作家なのである。だが、ウーゴ・フォスコロ(1778-1827)や前掲のマンゾーニ(1785-1873)といった同時代の文学者に比べ、レオパルディについては、リソルジメントとの関係が論じられることが少ない。確かに、「無限 *L'infinito*」「シルヴィアに *A Silvia*」「思い出 *Le ricordanze*」といった著名な抒情詩も、『オペレッテ・モラーリ』に収められた哲学的な散文も、国家統一運動とは全く関係がない作品のように思われる。

だが、そのレオパルディもまた少数の愛国文学を残している。いやむしろ、彼が1818年に執筆し翌年発表した2編の愛国詩は、彼の詩人としてキャリアをスタートさせた作品であった。少々長い詩集の題名全体を記すと、『ジャコモ・レオパルディのカンツォーネ集—イタリアについて、フィレンツェで準備されているダンテの記念碑について

Canzoni di Giacomo Leopardi. Sull' Italia. Sul monumento di Dante che si prepara in Firenze』となる。題名に《カンツォーネ集》とあるのは、収録された詩編が両者とも《カンツォーネ》という伝統的な詩形で書かれているためである。

第 1 のカンツォーネ「イタリアについて」を見てみよう。第 1 聯は以下のように始まる。なお、レオパルディはその後この作品に修正を加え、「イタリアに *All' Italia*」という題で詩集『カンティ』に収録しているが、本稿では 1818 年版の詩文を引用している。

ああわが祖国よ、私には、我々の父祖の
城壁が、凱旋門が、
円柱が、彫像が、寂しげな楼閣が、見える。
だが、栄光は見えない。
我々の高祖が身に付けた
月桂冠も武具も見えない。
今やお前は無防備となり、
額も胸も露わにしている。

O patria mia, vedo le mura e gli archi
E le colonne e i simulacri e l' erme
Torri degli avi nostri;
Ma la gloria non vedo,
Non vedo il lauro e 'l ferro ond' eran carchi
I nostri padri antichi. Or fatta inerme,
Nuda la fronte e nudo il petto mostri.

冒頭、「私」は祖国イタリアに呼びかける。今も目にすることができる過去の遺産（「城壁」、「凱旋門」、「円柱」、「彫像」、「楼閣」）と、もう目にすることができない過去の栄光（「月桂冠」、「武具」）とが強いコントラストをなしている。レオパルディが回想するイタリアの栄光の時代は、イタリアが世界の中心に座していた時代、すなわち古代ローマ時代である。それに対して、レオパルディが生きた 19 世紀初頭のイタリア半島はいかなる状態にあったのだろうか。

1789 年のフランス革命勃発後、ヨーロッパは極度の緊張に晒されていた。1793 年にルイ 16 世が処刑されると、その緊張は臨界点に達する。絶対王政を死守したい周辺諸国（オーストリア、英国、

サルデーニャ王国等）が対仏大同盟を結成し、革命の発信地フランスに対して攻撃をしかけたのである。しかし間もなく、ナポレオンの登場に後押しされたフランス軍は反撃に転ずる。その後、主戦場はイタリアへと移り、ナポレオンは半島内の革命支持派の援助を得て、オーストリアやローマ教皇庁の支配下にあった地域を「解放」していく。そして、フランスの革命政府をモデルとした共和制国家を次々と成立させていったのである。

1797 年、ナポレオン軍はローマ教皇領に進出し《ローマ共和国》を樹立する。ジャコモ・レオパルディがローマ教皇領の一部であったレカナートイで誕生したのは、その翌年のことであった。父モナルドは教皇庁との結びつきもある反動思想の持主であり、ナポレオンの「侵略」を受けてその傾向を一層強くする。一方のジャコモは、幼少期には父の強い影響下にあったものの、成長するにつれ父の教えを離れていく。とりわけ、文筆家ピエトロ・ジョルダナーニとの出会い（1817 年）が契機となって、ジャコモは自由主義思想に染まったと言われている。だがその頃には、政治情勢もまた劇的な変容を遂げていた。

1804 年、ナポレオンは皇帝の地位につき、同盟諸国を従えてフランス帝国を樹立した。半島各地の共和国は、ナポレオン帝国の県に組み替えられたのである。危機を察知した周辺国は再び対仏大同盟を結び、それに対抗したナポレオンは帝国内の諸地域から兵士を招集し《大陸軍 Grande Armée》を結成する。《大陸軍》は 1812 年のロシア遠征の際に最大になり、そのうちには 5 万人近くのイタリア半島出身者がいたという。ロシア遠征は、よく知られているように《大陸軍》の壊滅的な敗北に終わる。そして、多くの《イタリア人》の血がフランス帝国のために流されることになる。

遠いロシアの戦場での《イタリア人》の大量死は、レオパルディの「イタリアについて」第 3 聯において嘆かれている。

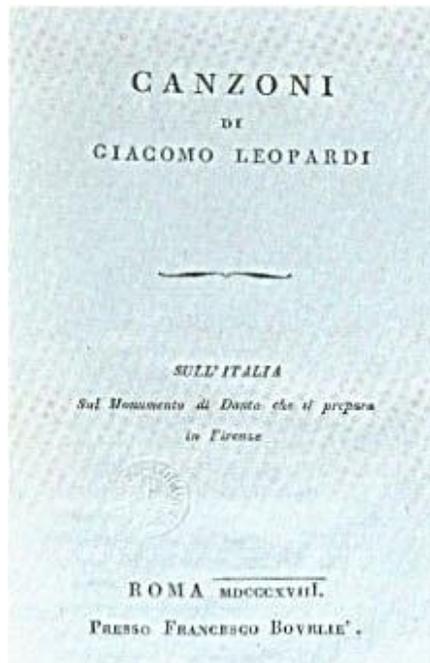
おまえの息子たちはどこにいる？ 武具と
戦車と怒声と太鼓の音が聞こえる。
外国の地で
お前の息子たちは戦っているのだ。

心せよ。イタリアよ、心せよ。
私の目には見える、いや立ち現れてくる、
兵馬の流れ行くさまが、
塵埃が、そして、霧の中の稲妻のように
火花を放つ刀剣が。
それでもお前は立ち上がらないのか。
そしていつも以上に
苦しみ嘆くのか。
ならば、私が感じるものは何であろうか。
若きイタリア人は
かの地で、誰のために戦うのか。神よ、神よ。
イタリアの軍人は他人の土地のために戦っているのだ。
ああ。悲惨なのは、自らの祖国のためでも、
敬虔な妻のためでも、愛する子供のためでなく、
他の国の敵の手にかかり
他の国の人々のために戦死する者。
彼は臨終のときこう言うことさえできない。
わが麗しき祖国よ、
私に命を与えてくれたお前にこの命を返そう、と。

Dove sono i tuoi figli? Odo suon d' armi
E di carri e di voci e di timballi:
In estranie contrade
Pugnano i tuoi figliuoli.
Attendi, Italia, attendi. Io veggio, o parmi
Un fluttuar di fanti e di cavalli,
E polve e fumo, e luccicar di spade
Come tra nebbia lampi.
Nè ti conforti? ed oltre al tuo costume
T' affanni e piangi? or che fia quel ch' io sento?
A che pugna in quei campi
L' itala gioventude? O Nume, o Nume!
Pugnan per altra terra itali acciari.
O misero colui che in guerra è spento,
Non per li patrii lidi e per la pia
Consorte e i figli cari,
Ma da' nemici altrui
Per altra gente, non può dir morendo:
Dolce terra natia,
La vita che mi desti ecco ti rendo.
悲劇は、命をかけて守るべき祖国を未だ持た
ないイタリア人の多くが、他国のために命を落とし
たことであった。しかし、この不幸な事件を経て、

イタリア人のための国家《イタリア》が改めて強
く希求されるようになったはずである。レオパルデ
イは、その声を代弁していたのであろう。

レオパルディの処女作は一定の成功を収め、
彼は愛国詩人として認知された。ところがそれ以
降、レオパルディは政治色を帯びた作品を発表し
なくなる。不朽の名作「無限」がそのたった1年後
に執筆されたということは、実に興味深い事実で
ある。



【『ジャコモ・レオパルディのカンツォーニ』表紙】

[参考文献]

- Adriano Bon, *Invito alla lettura di Leopardi*, Mursia, 1985.
Giacomo Leopardi, *Canti*, Milano, Garzanti, 1999.
ジャコモ・レオパルディ(脇功訳), 『カンティ』, 名古屋大学学術出版会, 2006.
北原敦編, 『イタリア史』, 山川出版社, 2008.

(京都外国語大学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>